

「は〜い動かないでね〜。
下手に動くと
怪我することになるよ〜。」

「はいいきなり何をするのかね!？」

「あんたがここの
正規の職員じゃないってのは
バレてんだよね〜。」

「前回私達に何をしたのか、
尋問させてもらいます!！」

「…なるほど。」

証拠は残らないよう細心の注意を払ったが…
僅かな違和感を元に感づくとは流石だ。

……くくくつ! だがもう遅い。
お前たちはもう俺のモノなんだよ……!」

ドスッ

ガッ





「おっ」

「おっ」

「おっ」

「お前たちの本当の任務はなんだ？」

「おっ」



ぽー！

「ふう……？
本当の……任務……？」
「私達の本当の任務は……」

ぽー！



「私達の任務は
「敵をセックスで墮とし、無力化する娼婦」です。」
「私たちは『セックス大好きな淫乱』です。」

はっ♡

はっ♡

はっ♡

「何を今更…」

会話を続けて少しでも

時間を稼ぐ気？

だとしたら無駄だから。

今から早速セツクスで尋問するからね。

さっさとイッて吐いちゃいな。

「骨抜きにしますから、覚悟してくださいね♡」

「ふん。私の口は硬いぞ？

お前たちの技術で

口を割らせることが

出来るかな？」

はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡



くくくく…
後から発動させるキーワードが
設定されているとも知らずに、
迂闊だったな…!!
キーワードを
言われたこいつらは、

①情報はセックスでイカせて
引き出すものと思っでいる。
②ちよつとのことでイクくらい
身体の感度がアップしている。
③性行為に関する倫理観や
思考力が著しく低下している。
状態になるようにしてある。
つまり俺を追いつめているつもりが
性奉仕することになるわけだ。

まったく間抜けな奴らだぜ…
…それじゃ、この『セックス尋問』を
堪能させてもらおうとするか…!!



「あれ〜？ おじさんのおちんぽ、
触つてもいないのにバキバキじゃ〜ん♡
期待しちやつてるんじゃないの〜？」

「ふふ…どうやら思った以上に
簡単に済みそうですね。」

「おつと…これはうつかりだ。
だがまだ始まつてみなければ
分からないぞ？」



「ふっ… くう…♡
…ほらほら〜おじさんのおちんぼ…
食べられちゃつてるよ〜？
早く素直になった方が良いんじゃない？」

「く…っ 精液を搾り取るように
膣壁がうねって…！
流石、鍛えられているな…！
だが、この程度ではまだまだ…」

「れる…くちゅ…
こつちも…休ませませんよ…
どうです？ 私の舌使いは…」

「ふむ…口内の敏感な
部分を的確に責めてきて、
否が応でも感度を高められる…！
こちらもすごい技術だ…！」



「はあああ♡
おじさんのおちんぽすごく♡
尋問しなきゃなの♡
奥に当たる度に
頭真っ白になる♡」

「ぶっ♡ ふっ♡♡
れる…くちゅ…
ディーブキス…
気持ち良い…好き…♡」

「どく♡
どく♡
どく♡
どく♡

「く…男を墮とすのが目的だというのに
すつかり自らが快感を得るために必死ではないか！
乱雌どもめ！！ このように貪欲に貪られては
こちらも長くはもたん…！！」



「くっダメだ...! もう出る...!
よしっお前たちも一緒にイけ...!」

「ああっ
腰の動きが激しく...!?!
それに硬くなつて...
これダメツ...♡
ああ!! ああああああ!!!」

「んっ♡ んんっ!!
んんんんんんん!!!」





「ふう… くくく…
最高の眺めだ…!
キーワードさえ使えば
いつだってこいつらの
身体を味わえる…!
これからもずっと
使いつくしてやるぞ…!!」



「千束…いつまでも
余韻に浸ってないで
今度は自分でもっと
激しく腰を動かせ。
たきなももつと媚びるように
奥まで舌を絡ませろ。」

「ふあ…?
くう♡んっ はあ…♡
これで…良い?」

「ふあ…
分かりました…♡」



ふっ♡

ちゅっ♡

ふっ♡

くちゅ♡

ビク

ゴク

ぐり♡

ぐり♡

ふっ♡

ふっ♡

「くくく…
すっかりセックスそのものに夢中だな。
そういうえば、尋問はしなくて良いのか？」

「そんなの
どうでも良いっしょ♡
もつと楽しも♡」

「今度は是非喫茶店でも…♡
制服でするとまた気分が
変わるでしょうし♡」

ふっ♡

ふっ♡

ずっ♡

ずっ♡

くち♡

くち♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡
ちゅん♡

はっ♡

はっ♡
ちゅん♡

「ククク！」

「この調子では近いうちにキーワードも
必要無くなるかもしれんな…！」





























